

情報学研究科

I	教育水準	教育 23-2
II	質の向上度	教育 23-5

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、知能情報学、社会情報学、複雑系科学、数理工学、システム科学、通信情報システムの 6 専攻に、基幹、協力、連携分野の教員が適正に配置されている。また、他大学や産業界からも非常勤講師が任用され、平成 18 年度には、けいはんな連携大学院ユニットが設置されているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、ファカルティ・ディベロップメント (FD) のために、教務委員会において学生によるカリキュラムアンケート、修了生アンケート、企業人事担当者アンケートを実施し、その結果に基づいて教育改善を実施しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、情報学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、情報学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、大学院修士課程では階層性をもつカリキュラムを設定

し、体系的な教育課程が編成しているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、学生に対するカリキュラムアンケートや、修了生アンケートの結果、教育改善が行われる体制になっており、改善への対応を研究科のウェブサイトや報告書で公開しているなどの相応の取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、情報学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、情報学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

3. 教育方法

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、少人数教育に特徴があり、各専攻の教育目的に応じた授業形態のうち、特に社会情報学専攻では、演習・セミナーが多く配置されている。また、これらの実践的科目にティーチング・アシスタント（TA）が活用されているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、学生全員に学習スペースとノートパソコンが与えられ、授業時間以外の学習を促す仕組みが講じられているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、情報学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、情報学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

4. 学業の成果

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、大学院修士課程の学生の多くが修了し、国際会議での発表、学術雑誌への採択もなされ、大学院博士課程に進学した者の平成 19 年度までの学位取得修了生が約半数を占め、論文賞、学会発表賞の受賞数の増加もみられるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、大学院修士課程の修了生については、修了生アンケートにおいて各項目で肯定的評価が 70%～90%と修了生の満足度が高いなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、情報学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、情報学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、大学院修士課程の修了生の多くが企業の研究開発部門に就職し、大学院博士後期課程に進学・修了した者も常勤大学教員や、任期付きではあるが研究員の職に就いているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、大学院修士課程修了生に限られるが、企業人事担当者アンケートによれば、英語コミュニケーション能力とリーダーシップについては課題が

残るが、専門的知識については高い評価を受けているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、情報学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、情報学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 1 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 1 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。